

Dungeons, Dragons, and a Dutiful Daughter
The Old Curiosity Shop におけるヒロインの役割についての考察 *

中島 剛

1 : 序

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look at....

She was dead. Dear, gentle, patient, noble Nell, was dead. (557) ¹

Mentally drowned and blinded by the sticky overflowings of his heart, Dickens was incapable, when moved, of re-creating, in terms of art, the reality which had moved him....
Aldous Huxley²

The Old Curiosity Shop (1841 年一冊本刊行) の Little Nell (Trent) は、上に引用した死の場面に代表される感傷性のため、20 世紀以後 Huxley に代表される辛辣な攻撃を受け、小説発行当時愛された彼女の地位は、現在でも回復していない。確かに、彼女は「いい子」すぎ、ディケンズの後期の小説に登場する Estella や Lizzie Hexam, Bella Wilfer のような、主体性のある女性の魅力はあまり持ってないようだ。しかし、献身的で、善良で、若く美しく無垢という、天使という形容がヒロインに付与される時のお決まりの資質は、Little Nell だけに限定されたものではない。実際、ディケンズ小説の初期から中期にかけては、興味深いパターンが存在する。それは、Madeline Bray と Arthur Gride, Kate Nickleby と Sir Mulberry Hawk (共に *Nicholas Nickleby*) , Dolly Varden と Hugh (*Barnaby Rudge*) , Mary Graham と Seth Pecksniff (*Martin Chuzzlewit*) , Agnes Wickfield と Uriah Heep (*David Copperfield*) というように、純真なヒロインと、彼女を(性的な意味を含め)脅かす存在の対立が多く見受けられることだ。

The Old Curiosity Shop では、Little Nell に付きまとうのは、ディケンズの造形した人物の中でも最も記憶に残る悪党 Daniel Quilp である。多くの批評は Nell と Quilp の間の関係を基に、Nell の旅に小説の伝統や寓意性を見いだす意見、都会と田舎といった対照的な場所に関心を寄せる意見といった多彩な視点から、一見味気ない彼女の存在を説明・正当化する試みをしてきている。³ その中でも Steven Marcus が violate という言葉で Quilp と Little Nell との関係を解説しているのが興味深い。⁴

Consumed by a rapacious ecstasy, he [Quilp] is drawn toward Nell so that he may satisfy his instinctive craving to violate her.... [The] passion for purity becomes urgently felt only in proportion to the intensity of a passion for defiling it.(154)

一見奇矯に見える彼の説明だが、以下の *The Old Curiosity Shop* から引用した、Nell と Quilp との間のやりとりを見れば、それが的外れでないと思われる。

”You look very pretty to-day, Nelly, charming pretty. Are you tired, Nelly?” [said Quilp.]

”No, sir. I’m in a hurry to get back...”

”There’s no hurry, little Nell, no hurry at all,” said Quilp. ”How should you like to be my number two, Nelly?”

”To be what, sir?”

”My number two, Nelly, my second, my Mrs. Quilp,” said the dwarf....

”To be Mrs. Quilp the second, when Mrs. Quilp the first is dead, sweet Nell ... to be my wife, my little cherry-cheeked, red-lipped wife....” (52-53)

“My number two”になるよう誘惑する Quilp の誘いは、明らかに肉体的な欲望を持つ男のそれである。Angus Wilson も”Quilp’s feelings towards Nelly...seem to us...sensual, erotic, sadistic in a physical sense.”(140) と指摘した上、19 世紀に売春を強要された子供の存在にも触れ、歴史的視点からも Nell と Quilp の間の関係の重要性を示す。⁵

だが、性的な表現が避けられたヴィクトリア時代において、何故このような事態（それも、ディケンズ においては、指摘のとおり一度ではない）が起きているのか？ Steven Marcus が先程 Nell に関して具体的に述べた事実を、小説一般の伝統の文脈内で考えると、Nell の祖父の家に入り込み彼女を悩ます Quilp と、苦しめられるヒロインのこの関係（具体的箇所は後に引用）の理解には、Leona Sherman and Norman Holland が “Gothic Possibilities” で述べた “image of the woman-plus-habitation and plot of mysterious sexual and supernatural threats in an atmosphere of dynastic mysteries within the habitation has changed little since the 18th century” (279) という指摘が、その考察に有益と思われる。⁶その上で、ロンドンを舞台に小説世界を展開するディケンズは、dynastic mysteries の枠組みを彼独自の個性的人物群に変え、しばしば habitation を street や road に置き換えることで、ゴシック小説の方法論を利用してきたと筆者は考える。そこで本論文では、この「純潔な女性」と「それを狙う悪漢」の関係を分析し、ディケンズがいかにゴシック小説で使用される設定を利用しつつ、独自のヒロインの物語を作っていたかを考察し、Nell は Quilp があっての存在であり、その意味で、後期の自立したヒロイン像とは、小説の構造の中で占める性格が異なっていることを証明したい。

2 : Little Nell、小さなヒロイン

ディケンズの初期作品のヒロインに共通したことだが、人物としての Nell は実感の乏しい存在と思われる。事実、冒頭の Master Humphrey による Nell の姿は抽象的である。

[The] child in her bed: alone, unwatched, uncared for (save by angels), yet sleeping peacefully. So very young, so spiritual, so slight and fairy-like a creature ... I could not dismiss it from my thoughts. (19)

ディケンズはこの時、少女を感傷的に描くスケッチに留まっている。この短いスケッチから、連載中の雑誌の売り上げを気にして、Nell の物語を引き伸ばすことになり、話の展開の中で悪役 Quilp が登場するとすぐに、Quilp は、彼女をじろじろ見つめる行為で、少女を「妖精のような生物」から、手で触れることのできる、肉体を持った存在に変えてしまう。

Nell looked at the old man, who ... kissed her cheek.

”Ah!” said the dwarf, smacking his lips, “what a nice kiss that was--just upon the rosy part. What a capital kiss!”...

”Such a fresh, blooming, modest little bud, neighbour,” said Quilp, nursing his short leg, and making his eyes twinkle very much; “such a chubby, rosy, cosy, little Nell!”

(82;下線部は論文筆者による)

「小さなつぼみ」として、あるいは「ぼちゃっりとした、バラ色の、気持ちいい、小さな」肉体を持った少女として、Quilp は Nell を扱う。Nell は Quilp の目には、見られ、触られるために生きているかのようだ。さらに、

”What a pretty little Nell!” cried Quilp....

“Has she come to sit upon Quilp's knee,” said the dwarf in what he meant to be a soothing tone, “or is she going to bed in her own little room inside here--which is poor Nelly going to do?” ...

“I am not going to stay at all,” faltered Nell. ...

”And a very nice little room it is!”... “Quite a bower. You're sure you're not going to use it, you're sure you're not coming back, Nelly?”

”No,” replied the child ... “never again, never again.”

”She's very sensitive,” said Quilp looking after her. “... The bedstead is much about my size. I think I shall make it *my little* room.”... [The] dwarf walked in to try the effect, which he did by throwing himself on his back upon the bed with his pipe in his mouth, and then kicking up his legs and smoking violently. (96;下線部は論文筆者による)

Nell が膝に座る要求に応じなくとも、Quilp はかまわず「小さな」Nell の「小さな」部屋に居座り、Master Humphrey が「天使に見守られた」と述べたはずの Nell のベッドに寝ころがり、タバコをふかして匂いをつけることで、間接的に彼女に触れ、その肉体を興奮して感じる。⁷ 強調される Nell の小ささ、弱さは、Quilp が彼女を支配することを楽しみ、また、その欲求によって動かされていることを表す。

当初はスケッチにすぎないはずの、けなげな少女のモチーフが、緊急避難として長編化されるにあたり、ゴシック小説の「監禁された乙女」の様相を帯びる。当初から骨董品に囲まれるヒロインという点において、Nell は、Otranto や Udolpho の古城にいると同じような状況で描かれたわけだが、後に論じるように、ディケンズの関心は terror や sublime といった概念ではなく、苦難に耐える少女のその姿にある。Radcliffe お得意の「深夜の孤独」「奇怪な音」「謎の人影」といった素材を援用しながら、恐怖の演出に関して大きな相違を

見せつつ、ディケンズは物語を展開させる。Norman Page は、前述の Quilp に迫られる Nell の立場を”a kind of early Victorian Lolita”(xviii)と評している。確かに、暗示される性的意味合いを見ればそうだが、本質的な相違も見逃してはならない。それは Little Nell は、自分から行動を起こす Lolita の現代女性の性格からは程遠く、常に受動的に苦難を耐えていくことだ。中年男を翻弄して、最後に別の男と一緒に暮らす Lolita - - それはディケンズのライバル、サッカレーの創造した Becky Sharp を連想させる - - とは反対に、Nell は前述の Sherman and Holland のいう sexual and supernatural threats の影響下に常にいることで、物語を成立させていく。だが、その「脅威」の性質は、ディケンズがイタリアの古城でなく、近代英国に舞台を移したことで、以下に分析する Nell の経験する出来事に見られるように、修正が加えられていく。

一度は、祖父と共に、Quilp たちに差し押えられた骨董屋から逃げ出した Nell だが、物理的に離れていても、Nell への Quilp の欲望は追い掛けてくる。Mrs. Jarley と共に Nell が蠟人形の見せ物をする予定の町に来た時も、彼女は独り物陰から Quilp の姿、それも、Quilp が、彼女を手招きして(第 27 章)呼び寄せる姿を目撃してしまう。本当は Quilp は手下の Tom Scott を呼んでいるだけなのだが、それでも Nell にとって恐怖を作り出すには充分だ。その後 Nell は、”a legion of Quilp”(216)が周囲の空気に一杯になったと感じ、眠ることができない。Nell のベッドを汚した Quilp は、今度は夢の中に現れて彼女を間接的に襲ってくる。ディケンズは Quilp の肉体的な欲望の力を別の形の変えて、二度も繰り返しかえし Nell を襲わせる。

[Nell] could get none of but broken sleep by fits and starts all night, for fear of Quilp, who throughout her uneasy dreams was somehow connected with the wax-work, or was wax-work himself....(217)

Quilp indeed was a perpetual nightmare to the child, who was constantly haunted by a vision of his ugly face and stunted figure. She slept...in the room where the wax-work figures were, and ... at night ... she tortured herself ... with imagining a resemblance ... to the dwarf, and this fancy would sometimes so gain upon her that she would almost believe he had removed the figure and stood within the clothes. (226)

Quilp は確かに逃走した Nell を発見できないが、Nell にとって、彼に襲われる恐怖は簡単に振りほどけない。あっさりその最後が明示され、小説から消える Radcliffe の悪役 Montoni や、その真相が説明される「幽霊の顔」等とは本質的に異なり、Quilp の体現する恐怖は、いつもヒロインに消えずに付きまとう不安なのだ。

3 : 恐怖の意味

ゴシック小説では、しばしば、誰かに見られる・侵入されるという恐怖が描かれるが、Little Nell の場合、その恐怖は繰り返しかえし強調されることで、ヒロインの性格づけに利用される。例えば、祖父が賭博のため、人の好い Mrs. Jarley から金を盗むことを賭博師たちから唆されていると知って、Nell は”I had a dreadful dream.... It is a dream of grey-haired men

like you in darkened rooms by night, robbing the sleepers of their gold.” (330) という夢を見た祖父に訴え、その犯罪を食い止める。自身の身に起きる苦難を、他者を救う力に変えてしまうことで、少女 Nell の不安・恐怖は、祖父に尽くすヒロインとしての、彼女の存在意義へと利用されるのだ。ここで作家は、オースティンが *Northanger Abbey* で”midnight assassins and drunken gallants” (169)ともじったゴシック小説の典型的枠組みを利用して、Quilp のような戯画的人物への恐怖の意味を、本質的に変化させるのだ。例としてその様子は、宿屋 *The Valiant Soldier* で Nell と祖父が Issac List たち賭博師たちと出会う後の場面(第 30 章)再現される。嵐の夜、少女 Nell が、一人で、宿の一室で眠れないでいる - - お決まりのゴシックの設定 - - と、部屋に誰がいるのに気付く。

What! The figure in the room!

A figure was there.... [And] there, between the foot of the bed and the dark casement, it crouched and slunk along, groping its way with noiseless hands, and stealing round the bed. She [Nell] had no voice to cry for help, no power to move, but lay still, watching it. (237)

Udolpho の古城で Emily が深夜 Count Morano が密かに部屋に入りこんでいるのを発見して凍り付く場面(第 2 巻第 6 章)、あるいは *The Italian* では、湖畔の家で眠っている Ellena を殺害するため Schedoni が部屋に忍び込む場面(第 2 巻第 9 章)を連想させる、ヒロインへの危機がここで描かれる。しかし、人影は正体を明かさぬまま去り、廊下に出ていくことで、即座に Nell の視線は、彼女自身ではなく、隣の部屋の祖父の身への危険として、この状況を捉えることになる。

The idea flashed suddenly upon her -- what if it entered there, and had a design upon the old man's life! She turned faint and sick. It did. It went in. There was a light inside. The figure was now within the chamber, and she, still dumb -- quite dumb, and almost senseless -- stood looking on. (238)

現代の読者ならなおのこと、おそらく当時の読者も、簡単にこの人影の正体が、Nell から金を盗みだして賭博に走った祖父であることは、容易に想像できただろう。ここで注目すべきは、ある一定のパターンの存在である。それは、ゴシックの定石どおり、常に恐怖・不安の要因(Quilp や人影等)はヒロイン Nell を襲い、彼女は無力ながらそれに耐えるのだが、彼女がそこから逃げる理由として意識するのは、自身の安全のためでなく、必ず「祖父のため」だということだ。

The Old Curiosity Shop で繰り返し見られる同パターンは、ディケンズ が Nell のように献身的な少女を好んで描くことと並べると理解しやすい。例えば、老人を介護する少女の姿は、はやくも *The Pickwick Papers* (1837)の中の監獄の描写に登場している。

[An] old man was seated ... with his eyes rivetted on the floor, and his face settled into an expression of the deepest and most hopeless despair. A young girl -- his little granddaughter -- was hanging about him endeavouring with a thousand childish devices, to engage his

attention.... (657)

この短いスケッチから4年後、*The Old Curiosity Shop* が誕生し、さらにそれから16年後、夜道を一人で歩いていた Little Nell は、今度は Little Dorrit として、破産した父のために再び夜のロンドンの街を歩いて仕事場へと向かい、家計を支えることになる。この Amy Dorrit と父との立場の逆転は、そのまま Nell と祖父との関係の延長でもある。舞台はイタリアの山というゴシックの世界から近代のロンドンへと置き換えられても、ヒロインの不安定で弱い立場は変わらない。その上で、ディケンズの世界では、彼女たちは常に他者のために尽くし、自分の意思を否定することで、その存在を意味づけていくのだ。

ヒロインは危機にさらされるが、彼女は自身のことは顧みない。このパターンはパンチ人形師の Codlin と Short の二人が登場した時、すでに原型ができていた。彼らは、老人と Nell が施設から逃亡してきたと考え、お礼の金目当てに彼女たちを手元に置いておこうとする。だが、Codlin の行動は、Nell にそれ以上の動機があると思わせるに十分だ。

Nell retired to her poor garret, but had scarcely closed the door, when it was gently tapped at. She opened it directly, and was a little startled by the sight of Mr. Thomas Codlin, whom she had left, to all appearance, fast asleep down stairs. (153)

当初は、慎重な性格の強調とも取れる Codlin の怪しい行動は、ここで”Tom Codlin's the friend” (154) と Nell に話し掛け、その後もこっそり付きまとうことで、ヒロインを監禁する Quilp のような悪漢の姿すら連想させる。

Thomas Codlin stole on tiptoe, leaving the child in a state of extreme surprise. She was still ruminating upon his curious behaviour, when the floor of the crazy stairs and landing creaked beneath the tread of the other Travelers.... When they had all passed ... one of them returned, and after a little hesitation and rustling in the passage, as if he were doubtful what door to knock at, knocked at hers. (154)

見知らぬ場所でのヒロインの寝室や、そこに近づく見えない姿や足音の題材は、先に論じたもっとゴシックの色彩の強い彼女の祖父の姿へと発展するが、その一部はすでにここで利用されている。その後も Codlin は”Mr. Thomas Codlin ... kept close to her, and ... warned her by certain wry faces and jerks of the head ... to reserve all confidence to Codlin.” (155) と Nell に近付き、相棒 Short が Nell と楽しそうに話していると、Codlin は彼女のくるぶしへ、担いだパンチの小屋の足を何度もぶつけ、彼女に不安を抱かせる（第19章）。しかし、この時 Nell が考えることは、二人が彼女の祖父を監禁しようとしていることで、Short の目を盗んでは Codlin が自分に接近しようとしていることではない。もちろん彼女の推測は正しかったが、同時に Codlin 自身が後に the single gentleman に対して “Did I always say I loved her, doted on her? Pretty creature...” (290) と話すように、Codlin が有り難くない好意を Quilp 同様に彼女に抱く事実、そこから生じる Nell の不安が小説では強調されている事実が重要なのだ。

当初、骨董屋で深夜一人眠る少女のスケッチとして登場した Nell に会い Master Humphrey が考えた「危険」は、”all the possible harm that might happen to the child -- of fires and robberies and even murder” (17) と列挙されるが、論じてきたように、実際に物語のヒロインとなって彼女が経験する恐怖は、このどれでもない。むしろそれは、*The Mysteries of Udolpho* において、Montoni によって Udolpho の古城に閉じこめられ一人眠る Emily St. Aubert の寝室に侵入し、彼女を妻にしようとする Count Morano が与える恐怖と同質のものだ。

[Emily] now screamed in despair, and, believing herself given up by Montoni, saw, indeed, no possible escape....

“Why all this terror?” said he [Count Morano], in a tremulous voice.

“Hear me: I come not to alarm you.... I love you too well....” (261)

ヒロインの恐怖は、深夜の人影へのそれを越え、おそらくは “honour” と婉曲に呼ばれる女性の純潔を失うことへのそれと交ざりあう。Codlin の不審な行為も、祖父の人影も（宿屋には、荒っぽい賭博師たちがいて、メイドがこの場所を “a very indifferent character” “too much card-playing, and such like” (237) という言葉で形容）、そしてなによりも明白な Quilp の態度も、こっそり忍び寄る影のイメージに代表される恐怖へとつながる。逃げ場がないヒロインの唯一の出口は、彼女を包囲する男性たちの支配に屈することしかないのだ。

ディケンズは、ゴシック小説の形式を援用しつつ、自己否定する彼自身のヒロイン像を中心にするにより、危険にさらされる少女 Nell の物語を展開させていく。まだ単なるスケッチとして描かれる第 1 章では、Nell はゴシック的な廃墟の要素に囲まれながら

[The] dark murky rooms -- the gaunt suits of mail with ghostly silent air-- the faces all awry, grinning from wood and stone -- the dust and rust, and worm that lives in wood -- and alone in the midst of all this lumber and decay, and ugly age, the beautiful child in her gentle slumber, smiling through her light and sunny dreams. (20)

その見る夢は「明るく穏やか」ものである。しかし、ただのスケッチを延長し、献身的なヒロインとして Nell の物語を近代の英国で展開した瞬間、Master Humphrey の”all the possible harm” という抽象的な「少女への危険」は、家庭を失うことから始まって、次々と「悪夢」の視線にさらされることにより具体性を増し、Nell の “light and sunny dreams” は Quilp の姿に代表される、もっと現実的な彼女を取り巻く不安の連続に変化する。最後にこの状態を Nell が経験するのは、Mrs. Jarley から別れた後、はしけに乗せてもらう時である。“Avoiding the small cabin ... which was very dark and filthy, and to which they [bargers] often invited both her and her grandfather, Nell sat in the open air....” (334) と Quilp のように手招きされることで、再び Nell は不安を感じるのだが、逆説的にその瞬間、ヒロインは Quilp が彼女を「ぼちゃっとした、バラ色の、気持ちいい、小さな」少女として扱った時のように（本論 3 ページ参照）、”a very pretty voice, every soft eye” (336) をした、体を持った少女として歌を歌い、第 1 章では”exist in a kind of allegory”(19) という、ただのイメージにすぎなかったヒロインが、肉体のあるもの、触ることができるものとして扱われるのだ。しかし、先に

論じたように、少女自身は、自分への危険への意識を、祖父への危険に向ける。その時、少女 Nell は、祖父の犯罪をくい止めた時の彼女の姿、“a spirit” (330)に変化する。こうして、少女 Nell は、肉体のあるものと、ないものの両方として、微妙な綱渡りを続けていく運命にあるのだ。

ディケンズは一方で彼女を、自己存在を否定する「精霊」のごとく扱いながら、他方で彼女に関心を持つ者の視線（あるいは悪夢）を導入して「少女」として扱う。皮肉にも、ゴシック小説の構造からヒロインが離脱し、憎むべき「悪漢」Quilp から離れていくほど、Nell の前者の性質が強調されていくのだ。従って、Nell たちが工業地帯へと足を踏み入れた時のように、彼女一人に向き合う存在（たとえそれが悪夢でも）が消える瞬間、ヒロインが最大の苦難を受けることになるのだ。工場の街では、人々は、“The throng of people hurried by ... intent upon their own affairs.” “...each man has an object of his own, and feels assured that ever other man has his”(338)と、無関心を装い、“No one passed who seemed to notice them, or to whom she durst appeal.”(339) と、誰も彼女たちを構おうとしない。わずかに二人を助ける、工場の火を友人にする男でも、寝床を与え、道を教え、わずかな金を与えることしかできない。その上、Nell たちの姿は、“Men, women, children, wan in their looks and ragged in attire, tended engines, fed their tributary fires, begged upon the road, or scowled half naked from the doorless houses.”(348) と描かれる貧困、あるいは “maddened men, armed with sword and fireband” “the tears and prayers of women” “orphans cried, and distracted women shrieked”(349) という群衆の暴動描写に埋もれていく。語り手は“who shall tell the terrors of the night to that young wandering child!”(350)と述べるが、繰り返し少女に与えられた Quilp のゴシック的恐怖とは違い、この「夜の恐怖」は、本来彼女が知ってはならない恐怖、Nell の存在を完全に無にする現実の恐怖なのだ。

もし、実際のロンドンで少女が Nell のように放浪生活を始めれば、待ち受ける運命は後者の恐怖だ。それゆえ、工場での現実の貧困生活の恐怖の中で Nell たちは、“as strange, bewildered, and confused as if they had lived thousand years before, and were raised from the dead and placed there by a miracle”(337) と、死んだ者、そこに存在するはずのない者として描写される。だがディケンズは、先に引用した、Sherman and Holland のいう Quilp に代表される sexual and supernatural threats というゴシックの枠組みの中に Nell を置くことで、一種の寓話として、ヒロインの旅を成立させてきた。旅の初めに彼女が“I feel as if we were both Christian”(125)と、昔店にあった *The Pilgrim's Progress* の本を思い出すが、小説の構造としては確かに、誘惑して招く Quilp の悪夢から逃れる彼女は、多くの誘惑を斥けて進むクリスチャンに似ている。だが、クリスチャンが寓話のレベルでのみ存在可能なと同様に、Nell も、ゴシック小説の構造の中でのみ生きられるのだ。逆説的にいえば、Quilp の悪夢の存在が、その恐怖にかかわらず、あるいはそれ故に、Little Nell を生かし続けていることになる、といえるだろう。

Norman Page は、Nell の別の運命の可能性について、“A Nell...who married Kit Nubbles, bore him a large, rosy-cheeked family and lived happily ever after, would betray the ideal the child represents.”(xviii) と述べ、彼女の幸福な結婚が、「天使のように他者のために尽くす」少女のイメージを壊すことを指摘する。それはちょうど、Nell が Mrs. Jarley のもとで働いていた時、Nell の美貌が街の話題となって、

“The beauty of the child, coupled with her gentle and timid bearing, produced quite a sensation.... Grown-up folks began to be interested in the bright-eyed girl, and some score of little boys fell desperately in love....” (225)

と大騒ぎになる様子から十分うかがえる。ある種、当時軽蔑されていた女優のように、自分の生活のために、自分の美貌を利用する行為は、Victoria 時代の行動規範では、「天使」のそれに程遠い。だが、旅の途中、ヒロインの生活が一番安定するのはまさにこの時期であり、そこには「人々（まず男性）」の「興味（性的なニュアンスも含め）」があることを見れば、Nell を生かすのは Quilp の体現する衝動、あるいは、自分の”Number Two”になれという彼の誘惑だといえる。この意味において、ヒロイン Nell の別の結末を想像するなら、それは、”Mrs. Nubbles”としてではなく”Mrs. Quilp”として存在するのだろう。⁸実際の Mrs. Quilp（最後には、Nell 同様、”Little”を付けられる）も、夫と別れることを希望するわけではなく、むしろ、彼と一緒にいることを本気で希望している。しかし、彼女の「尽くす」イメージは、Nell の死に際して強調された”Dear, gentle, patient, noble Nell”(557)の「尽くす」少女の形容とは、性的な含意の有無、純粋性の極致としての天使のイメージという点において、完全に逆転している。夫 Quilp の死後、

“Little Mrs. Quilp ... consulted in her second choice nobody but herself”(569)

と、残された遺産で裕福になり、Lolita のように自発的に新しい男性を見つける姿も、ディケンズの物語の中心となるヒロインの取るべき態度ではないのだ。こうして純粋な少女 Nell は、実際にはありそうにない「純粋さ」 - - 男性と触れそうで触れない微妙な距離感によって成立する、男性の共通の幻想 - - を維持するため、物語の初めの段階から、永遠に死ぬまでさ迷うことが運命づけられていたのだ。

結論

Little Nell が旅の途中、競馬場で花を売ろうとする時に、娼婦と思われる女性に声をかけられるが、この場面はディケンズのヒロインの立場を象徴している。

There was one lady who seemed to understand the child, and she was one who sat alone in a carriage, while two young men in dashing clothes, who...talked and laughed loudly ... appearing to forget her, quite. There were many ladies all around, but they turned their backs, or looked another way....She motioned away a gipsy-woman urgent to tell her fortune, saying that it was told already and had been for some years, but called the child towards her, and taking her flowers put money into her trembling hand, and *bade her go home and keep at home for God's sake.* (159;イタリックは筆者)

だが、帰るべき家庭（骨董屋）もなければ、結婚して作る家庭もない Nell の本来たどりそ

うな運命は、まさにこの”one lady”のそれだろう。だが、そうならないこと、その可能性すら認識しないこと（Nell はこの女性の立場を理解しているように思えない）によって、ヒロインはその純粋性を保たれる。その一方で、Quilp に代表される「性的な誘惑」を彼女に接近させることにより、作家はヒロインの “Dear, gentle, patient, noble” と感激した性質を際立たせ、同時にゴシック小説における危難に遭う女性の構図は、この点でおおいに利用されるのだ。

しかし、これまで論じてきたように、現実の近代英国の世界においては、女性が生きていくのに本来必要なのは、誰もが通り過ぎる群衆の無関心ではなく、作家が懸命に強調するまさにその「危難」、Quilp がヒロインに誘惑して語った”Number Two”への選択なのだ。⁹ここで、Edgar Johnson の伝記 *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* に記録されている、本論最初に引用した Nell の死の場面への、作品発行当時の反応を読みなおせば、感傷的と批判されたヒロインの本質がより明確に理解できるだろう。

Dickens's readers were drowned in a wave of grief ... he [W.C. Macready] noted in his diary. "I could not weep for some time. Sensations, sufferings have returned to me, that are terrible to awaken...." Daniel O'Connell, the Irish M.P., reading the book in a railway carriage, burst into tears.... Thomas Carlyle ... was utterly overcome.... [Walter Savage] Landor felt that her story might have beguiled Desdemona of her tears. Lord Jeffrey was found by a friend, Mrs. Henry Siddons, in his library with his head bowed upon the table; he raised it and she saw that his eyes were bathed in tears. (304)

Northanger Abbey で熱心にゴシック小説について語っていた Catherine Morland のような、女性の姿は出てこない。もちろん、記録されなかっただけという可能性もあるが、それでも、男性読者が、共通して求める何か、Desdemona 以上に男性（あるいは男性の理想）に忠実で、大きな苦難にも耐える女性の姿に感動する一方、逃げ道がありながら自己否定し半ば自殺するヒロインに、ここまで共感する女性読者は少なかったのではないか。現在では大げさに響く Victoria 時代の少女 Nell の死に対する感傷性の裏には、単なるお涙頂戴以上の少女の姿、つまり、ゴシック小説の「責め苛まれる女」という枠組みが象徴する、当時の社会規範に基づく男性から見た女性観や、貞節や献身という資質に捕われて、未来への行き場を失うヒロインの姿があるのだ。

注：

* 本論は 1996 年 9 月 21 日に同志社大学で開催された、日本比較文化学会関西支部研究会に於いて、『再訪 *The Old Curiosity Shop*: 少女 Nell の旅の意味』の題で行った研究発表の原稿をもとにしている。

1. Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop* (the Clarendon edition; Oxford: Oxford University Press, 1997) 557. 本論文中のこの作品からの引用は全てこの版からとし、引用頁数は各引用の最後のカッコ内の数字で表示する。

2. Aldous Huxley, "Vulgarity in Literature," *Charles Dickens: Critical Assessments*, ed. Michael Hollington (East Sussex: Helm Information Ltd., 1995), II, 360.
3. 小説の歴史の観点から、Edgar Johnson は "Some of the newness of *The Old Curiosity Shop* assuredly lies in its daring fusion of the picaresque novel and the novel of sentiment." と述べている。Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (New York: Simon and Schuster, 1952), I, 324 を参照。また Quilp と Nell の関係を、都会と田舎に関連づける意見として、John Lucas は "[Nell and her grandfather] are fleeing not only from Quilp, but from a world of values with which he is linked and which are peculiarly associated with the city...." John Lucas, *The Melancholy Man* (London: Methuen & Co. Ltd., 1970), 80. を参照。一方、民話的要素から Harry Stone は "Quilp's sexual potency hovers perversely over the immature, virginal Nell." と指摘した上で、Quilp は魔術を使える "malignant gnome" あるいは "storybook goblin"、また Nell については "the disinherited fairy princess" としている。Harry Stone, *Dickens and the Invisible World* (London: Macmillan, 1979), 109-110. を参照。
4. 本論では取り上げなかったが、ディケンズの Nell の感傷的な描写の原因を、作家の義妹 Mary Hogarth の死に関連づける意見も多い。ディケンズと Mary Hogarth の関係については Fred Kaplan, *Dickens: A Biography* (London: Hodder and Stoughton Ltd., 1989), 91-93. を参照。
5. Nell と Quilp の間の性的なニュアンスを持った視点からの論考では、小松原茂雄『ディケンズの世界』(東京：三笠書房、1989)、115-129. も有益である。
6. より大きな欧州文学の流れの中での「責め苛まれる女」については、Mario Praz の『肉体と死と悪魔 ロマンティック・アゴニ - 』*La Carne, la Morte e il Diavolo nella Letteratura romantica* (東京：国書刊行会、1986) の第3章を参照。
7. タバコを吸う行為の性的意味について、Gabriel Pearson は "The account of Quilp keeping his wife up all night by him...is the closest we get to downright copulation in early-Victorian fiction." と述べている。John Gross and Gabriel Pearson, "Dickens and the Twentieth Century", *Charles Dickens Critical Assessments*, II, 376.
8. James R. Kincaid は Besty (Mrs. Quilp) を Nell の代わりと考える："Now Besty Quilp is very nearly Nell's double...." James R. Kincaid, *Dickens and the Rhetoric of Laughter* (Oxford: Oxford University Press, 1971), 83.
9. ディケンズ は後に、*Great Expectations* (1861) に於いて、ゴシックの枠組みに沿った、Nell とは違った種類のヒロインの運命を描く。Joseph Wiesenfarth は、崩壊した Satis House に住む Miss Havisham について、"Dickens has telescoped the charnel house and the castle of old Gothic fiction into a bourgeois manor house run to ruin by a greed.... Miss Havisham is the wronged innocent heroine who has become the ghost in the haunted house. Satis House is Miss Havisham...." (85) と述べる。結婚式の日自分を捨てた男性を忘れるという合理的選択が出来ず、生きながら廃墟と化す人生を歩む Havisham は、自身が Quilp のようなグロテスクな存在と変化することで生き延びるが、Nell の場合は逆に、ヒロインはグロテスクな骨董品に囲まれて登場し、死ぬことで、彼女の無私な清純さが強調される。やはり Quilp の "Number Two" として Nell を考えることは、Nell の性格設定がある以上不可能なのだ。Joseph Wiesenfarth, *Gothic Manners and the Classic English Novel* (Madison: The University of

Wisconsin Press, 1988), 85.

参考文献

- Austen, Jane. *Northanger Abbey*. Ed. Claire Grogan. 1818. Toronto: Broadviewpress, 1998.
- Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. Ed. Elizabeth M. Brennan. 1841. Oxford: Oxford University Press, 1997.
- *The Old Curiosity Shop*. 1841. Ed. Norman Page. London: Penguin, 2000.
- *The Pickwick Papers*. 1837. Ed. James Kinsley. Oxford: Oxford University Press, 1986.
- Gross, John and Pearson, Gabriel. "Dickens and the Twentieth Century", *Charles Dickens Critical Assessments*, Vol. II. Ed. Michael Hollington. East Sussex: Helm Information Ltd., 1995.
- Holland, Norman and Sherman, Leona. "Gothic Possibilities." *New Literary History*, 8. 1977.
- Huxley, Aldous. "Vulgarity in Literature." *Charles Dickens: Critical Assessments*, Vol. II. Ed. Michael Hollington. East Sussex: Helm Information Ltd., 1995.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Triumph and Tragedy*. New York: Simon and Schuster, 1952.
- Kincaid, James R.. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- Lucas, John. *The Melancholy Man*. London: Methuen & Co. Ltd., 1970.
- Marcus, Steven. *Dickens from Pickwick to Dombey*. New York: Norton, 1965.
- Radcliffe, Ann. *The Mysteries of Udolpho*. 1794. Ed. Bonamy Dobrée. London: Oxford University Press, 1998.
- Stone, Harry. *Dickens and the Invisible World*. London: Macmillan, 1979.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. New York: The Viking Press, 1970.
- Wiesenfarth, Joseph. *Gothic Manners and the Classic English Novel*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1988.

収録紀要

『主流』64号 2003年3月発行 同志社大学英文学会 pp.15-34.